

## From the Publisher

## 専門家の薦める英語の上達法と無手勝流の類似点



編集発行人・辻本一樹

しばらく前にこの欄でデトロイトを本拠としてご活躍の同時通訳家の鈴木いずみさんを紹介したところ、鈴木さんのところに日本の部品メーカーT社の海外部長 Fさんからメールが届いたそうです。Fさんは「昭和38年生まれサラリーマンで、海外客先相手の仕事に20年以上従事しておりますが、英語レベルは中学生程度です」、「英語を上達するための体験談、教本などを知りたい」というメールです。これに対する鈴木さんの返信は長文にわたるものですが、鈴木さんの承認を得ましたので、その一部をご紹介します。鈴木さんは「日本人の方は謙遜される方が多いので『中学生レベルの英語』とは呑み込みにできません」としつつ「まずご自分の一番不得意な分野を見極めて、それから攻める手」を薦めています。鈴木さんはもちろん学生時代を通じて英語ができた人ですが、通訳の勉強を始めて感じたのは「経済学とか政治学、歴史といった分野の理解が不足していて語彙も乏しい」ということだったそうで、友人と勉強グループをつくって、これら世の中で必要な概念の勉強に打ち込んだそうです。

そして、鈴木さんがアメリカに住みはじめて感じたのが「私は英語ができるはずなのに、なぜ、アメリカ人のように話せないのだろうか？」ということでした。その理由を鈴木さんは「ある問題や課題を聞いた時に即座に自分の考えをまとめるのが苦手」ということに気がきます。欧米人は小さい頃からクラスで「Show and Tell」の時間があり、人前に立って「自分は最近こういうおもちゃをもらった。これはこれこれの役に立つ」など、自信をもって話せるように躡けられます。鈴木さんは「これがひいては Public Speaking になっていくわけですよ」といいます。語彙を増やしたいなら、例えばビジネス英語なら「TIME や BusinessWeek を毎日読むこと。辞書をひく必要はありません。引いて書いて憶えようとする」といいます。そしてヤマハ発動機の社長さんの例（英語を非常にきれいに話す氏は海外で英語を勉強したことはないが、毎朝始業前に30分間、イギリス人の英語の先生のレッスンを20年以上にわたって続けているそうです）を挙げて「継続は力なり」といいます。そして最後に「日本語は好きですか？立派な日本語をお話になる方は英語も上達が速いようです」と締めくくっています。筆者にとって、「不得意の分野から攻める」というのは耳が痛い思いがしますが、あとのご指摘は「まったくその通り！」と腑に落ちます。

ごろ日本の新聞に二つのオピニオンが掲載されていました。一つは日本の英語教育に詳しい某地方大学の学長さんの書いたもので、「ビジネスマンでも政治家でも外国人とのすべての会話に通訳を介しているのは日本だけ」と指摘しています。たしかに、中国の人々でも韓国の人々でも、他のアジア諸国の人々でも、外国での大事な交渉ごとには同時通訳も使いますが、挨拶や個人的な友好の時間はほとんどが英語で話しています。筆者の経験では多くの場合、ある程度お国なまりのアクセントの強い英語ですが、もの怖じしない英語です。そしてもう一つの記事は医大として有名なジョージ・ホプキンス大学のインターナショナル・ビジネス学科のインド系教授（名前は覚えていません）が先に来日した折に日本の某大学院の教授たちとの懇談で「日本の大学院の授業が日本語で行なわれているのは海外からの優秀な学生は留学してこない」と指摘して大学関係者を慌てさせています。たしかに、「他国からの優秀な頭脳の受け入れ」をおいたとしても、日本語でしか語られないビジネススクールで学んだことを、このグローバル化されたビジネスの現場で活かすのは至難のことでしょう。「大学院教育を英語でやる」これはグッドアイデアです。

週、ひさしぶりに多摩川の河川敷のゴルフ場「川崎りバーサイド」に行った時、偶然いっしょにプレーしたのはノルウエーから来日しているDさんでした。Dさんも物書きがプロフェッションで、ゴルフもなかなか上手く、強風の中でのプレーでしたが楽しい一日でした（筆者の強風の中での最後の7ホールを1アンダーというプレーは最近のベストゴルフ）。ノルウエー訛りとジャパニーズ訛りの英語でのやりとりでしたが、Dさんも楽しそうでした。アメリカのゴルフでは「Well educated slice」（よく身に付いた理想的でないスイングでのスライスショット）という言い方がありますが、筆者の英語はまさに「なりふり構わず」（マナーが悪いという意味ではなく、発音や少々文法が間違ってもコミュニケーションを完成させるという意味です）、必要に応じて自分の言いたいことを相手に伝える」というもので、まさに well educated slice なみの英語です。もっとも、筆者のショットはスライス系ではなくドロウ系ですが、しばしば加齢とともに腰が止まってチーピン（ひどいフックボール）が出るのが困りものです。じつは今朝、仕事に根を詰めて固まったアタマをほぐそうと、昼飯前にドライビングレンジに行ったのですが、「インパクトで顔をしっかり残す」ようにスイングすると自然にインパクトゾーンで腰がクルッと回るということに気がきました。いえ、どうせこんなヒントは次のオンコースプレーでは役に立たないのですが、まあ、これも勉強の一つです。 **NW**

## From the Publisher

## New Year's resolution : ビジネス英語を再勉強



編集発行人・辻本一樹

**通** 常なら「New Year's resolution」（新年の決意：日本では「1年の計は元旦にあり」ですか）は元旦にやるものですが、筆者の決意は2週間ほど前に決めました。たまたま立ち寄った本屋でNHKラジオの「入門ビジネス英語」という小冊子（定価380円）をみて購入。目を通しているうちに「ビジネス英語をあらためて勉強しよう」と決意したものです。筆者は1979年に渡米するまで英語には学生時代のほかほとんど縁のない生活で、米イミグレーションでのやり取りも、かつて舞台女優で生活のためにジャズのピアノ弾き語りをやっていた妻の英語力に頼ったぐらいでした。オハイオ州コロンバスの賃貸のタウンハウスに落ち着いて最初にとったのが地元紙の Columbus Dispatch と経済紙の Wall Street Journal。これを毎日読むことから始めました。もちろん、読んだって最初はわかりやしません。最初のうちは辞書をひきながら読もうとしたのですが、当時すでに39歳の記憶力では数行下に同じ単語が出てくると「あれ、何だっけ？」という始末です。そこでいちいち辞書を引くのはあきらめて、毎日ただひたすら新聞を読みました。

**コ** ケの一念もなんとやら、毎日、読んでいるうちに、キーワード（大抵は動詞）が記憶に残りはじめます。そして「多分、こんな意味だろう」と見当をつけて読み飛ばすのですが、その段階で辞書で正確な意味を確認すると、もうすでに顔見知り（？）の単語や熟語なので、中年（当時）のアタマでもなんとか徐々に読んでわかる言葉が増えてきます。そして何年かするうちに、ほとんどの記事は辞書なしで読めるようになりました。このころから弁護士ものの流行作家ジョーン・グリシャムの作品を原書で読むようになり、彼の作品はすべて読んでいます。グリシャムの英語は平易で、筆者にも分かりやすい文章です。その点、ジョーン・ル・カレの文章は読みにくく、もう何年も前に買ったハードカバー「Absolute Friends」は途中で投げ出したまま、ブックシェルフにあります（これを期にもう一度トライしますか）。そんなこんなで、筆者の英語力は読解読が主体。ヒヤリングは滞米25年の慣れで聴き取れますが、しゃべるのは自分の意見をなんとか相手に伝えられる程度。英語での文章力は手紙ならもっぱら「1001 Letters for All Occasions」のお世話になっています。— という状態なので、思いついたが吉日、年の瀬もつまった12月からNHKの「入門ビジネス英語」でもう一度、英語力を磨き直そうと決心した次第です。

**筆** 者の知人で一番の英語の達人はデトロイトを本拠として日米両国で同時通訳者として活躍する鈴木いづみさんです。鈴木さんはミシガンとカリフォルニアの法廷同時通訳のライセンスをもつ第1級の同時通訳者で、自動車業界にも明るく、かつてはGMやフォードのトップエグゼクティブの対日交渉の場で活躍された人です。筆者はカリフォルニア時代（1980年代）、日本の英語学の大学教授と夕食を共にしつつ懇談したことがありますが、その時に感じたのは「語学として英語に堪能でもアメリカ（あるいはイギリス）に住んでいない人の英語は今日の英語文化を踏まえていないので所詮は外国人の英語だ」ということです。その点、鈴木さんは1970年代から長年デトロイトに住み、アメリカ人の弁護士さんと結婚し、優秀なお子さんたちを育てた人。その同時通訳者としての実力は折り紙つきです。その鈴木さんでも、「日本語から英語の文章を書く時には筆達者な主人の助けを受けることもある」とか。日本語でも英語でも、日本人だから日本語を、あるいはアメリカ人だから英語を誰でもちゃんとした文章を書けるとはかぎらず、ましてやプロとして通用する文章が書ける人はごく限られた人たちですから、それも当然なのでしょう。

**鈴** 木さんはもとはバレエダンサーだったとか。それも17歳で東京バレエ団に入団、その後イギリスのロイヤル・バレエ・アカデミーで学ぼうとしましたが、「ソリストとしては背が高すぎる。バレエ教師のコースなら推薦する」と言われて諦めたというのですからハンバじゃありません。女性ソリストは男の踊り手がリフティングする場面があるので、身体が小さくないとだめというのは、冬季オリンピック種目のアイスダンスと同じようなことのようにです。そんな鈴木さんが過日、東京・麹町の通訳と翻訳家の養成学校「ISS Institute」で講演された時に筆者も参観させてもらいました。その時の鈴木さんの話は「通訳や翻訳家にはだれでも勉強を続けなければならない」「何よりも大切なのは日本語をしっかり身につけること」—などの言葉が筆者には印象的でした。正直のところ、筆者には「翻訳はできても、通訳は特殊な能力。自分にはとてもできない」というのが滞米25年間の結論ですが、まあ若い人にとってはまた別の話なのでしょう。筆者がもし、とても重要な用件で絶対に正確な通訳を必要とする時には、迷いなく第1級のプロである鈴木さんをお願いしますね。日本の通訳事情に明るい人々の間で常識となっているのは「一般にビジネスで使われている通訳者には能力の差が非常に大きい」ということ。通訳を使うなら、信頼できる人でなければ意味がありません。鈴木さんへの連絡先をご紹介します：izumi.suzuki@suzukimyers.com です。